The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	若き日の天囚 : 西村先生生誕百年に因んで
Author(s)	後醍院, 良正
Citation	懐徳. 1965, 36, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂記念會の諸先生

懐徳堂記念會は、明年を以て創立五十周年に達する。我々同人は、御指導を賜わつた諸先生を思うて、追慕の情切なるものがある。ここにこの號においては、然るべき方々から二篇の貴重な御追回の文を寄せられたので、これを巻頭にかかげて同人に披露することにした。一は記念會創設の中心人物であられた西村天囚先生に關するもので、今年がたまたま先生生誕百年に當る故を以て、先生と御縁故の深い後醍院良正氏が書いて下さつたものである。一は終戦前の記念會最後の講師に屬する新美寛先生に對する追懐で、先生の親友であつた鈴木隆一氏の筆に成つている。ここに兩氏に對して御厚意を深謝すると共に、これを同人に頒つて、静かに兩先生を偲びたい。

（編輯者）

若き日の天囚

西村先生生誕百年に因んで

後醍院良正

生地種子島

天囚、西村時彦（ときつね）は慶應元年七月二十三日、大隅國種子島西之表（現在、鹿兒島縣西之表市）の通稱大園（おおぞの）の地に生まれた。今ではその屋敷跡に「明朗幼稚園」が建設され、天囚をしのぶものとしては「西村天囚先生誕生之地　男爵種子島時望書」と刻まれた石碑が見られるばかりである。この碑は高さ五メートル半で、昭和十六年十一月に熊毛郡教育會が建てたものである。

天囚の父城之助は、名を時樹、字を子所、號は大塊といって島津の支藩種子島家の上士で、秀才のほまれ高き人であった。若いころに、江戸に出て鹽谷宕陰の門に學び、鹿兒島在勤のころは重野厚之丞（のちの安繹―やすつぐ）や小牧櫻泉、西徳二郎らと親しく交わっていた。天囚も「吾兄弟の先人は、少きより文學を修め、且つ韜鈐（とうけん―兵法）の家なりければ兵學をも究め……」（「甲午朝陣之序」）と記している。母淺子はやはり西之表の士族平山傳一郎の長女（天保十一年八月二十三日生、昭和二年五月七日歿）であった。

生地種子島は鹿兒市を去る六十二海里の太平洋に浮ぶ離島で、南北約六十四キロ、東西約十キロの南北に細長く延び、全體になだらかで一番高い石の峰でさえ、二百八十二メートルに過ぎない。遠く海上からこの島を望むと、大き

な波にさらわれてしまいそうな坦々とした島である。熱帯性の植物が繁茂し、小さいながらもバナナも採れる。ガジュマロ（榕樹）の大木は枝から幾條もの氣根が垂れ下がり異様な觀を呈している。

種子島といえば、たれしも眞っ先きに頭に浮ぶのは鐵砲傳來のことである。島の南端門倉崎には當時の記録を刻した碑が建っている。二段に築いた臺石の上に高さ八尺幅二尺五寸のもので「鐵砲傳來紀功碑」と題して天囚が文を撰している。この碑は大正十年一月に建てられた。全文漢文で九百字ばかり、その一部を抄録してみる。

（前略）天文十二年癸卯秋八月二十五日、有二一大船一漂二到西村小浦一。西村在二島之南端一。我家祖織部君居焉。君諱時貫有二文字一、與二船客明人五峯者筆語、知二其爲二南蠻商船一。乃告二日勝公一、（註―當時の島主）令二輕舸曳レ船、到二赤尾木一。赤尾木公治所也。船中有二葡萄牙人一、手携二火器一。公觀而奇レ之以二重値一購二獲其二一。織部君亦購レ之竝就學二其術一。公又令レ家臣笹川秀重仿製二中火藥一。八板清定傳二鑄造之法一。自レ此鐵砲始傳二播海内一。

父城之助は、慶應三年わずか二十七歳で急死した。天囚はこの時滿二歳、弟の時輔はまだ母の胎内にあった。この時以來、天囚兄弟は若き未亡人淺子の手ひとつによって育てられたのである。淺子は夫の急逝にあい、

ひと筋にきりつる髪の亂れじと思ふこころをあはれとも見よ

と詠み、生涯を二兒のために盡す決意を示した。

母淺子の育兒の努力もさることながら、幼時天囚に殊に目をかけたのは、外祖母の平山優子（文化六年生れ。明治二十年歿）であった。優子は學問を好み、和漢の史傳に通じ、もっとも和歌にすぐれていた。この優子のことについては、天囚が「老媼物語」（明治二十四年刊）の「むかしかたり」の冒頭につぎのように敍している。

予が母方の祖母君は若かりける時より文よみ歌を作ることを好みて朝な夕な敷島の道の栞（しおり）をたつね言葉（ことのは）の林に分け入り玉ひけるものから浮世の事しげくて思ふままに風流（みやび）の道にえふけり玉はざりけるが年老い玉ひては心にかかる雲もなくて（中略）子孫多き中にも予が三歳にして父に別れ母の手に人となりて

世にも頼少きをいといと憐み玉ひて日比のいつくしみ深く、曲れる背に負ひ、折れし膝に抱き、哺（く）めつ、舐りつ、劬勞大方ならず、殊に性得虚弱にして虫氣とやらんを病み、命さへ危ふかりけるを兎角（とこう）して撫育（はぐ）み人並に生立せ玉ひけり（後略）

天囚が四歳、弟時輔が二歳のころのことである。日ごろは兄弟仲よく遊んでいたが、時にはきかん氣が天囚の幼な心をゆさぶった。そして母を手こずらせることがあった。母は「お父さんが床の松陰から見て居らるどう」（見ておられるよの意）とたしなめると、すかさず天囚はこんな歌を詠んだ。

雨はふる床に活けたる松見れば思はるる父（とと）のことかな

母も、それ以上は叱ることも出來なかったということである。（「熊毛文學」河内久彦氏追憶記）

天囚は六歳の春から、父が親しく交っていた鄉儒前田豐山に託され、漢學の手ほどきをうけた。豐山の塾の掟は非常に厳しく、この幼童に拭き掃除から來客への應待の心得までしつけた。天囚はこのきびしさによく耐えてきた。天囚が八・九歳のころという。清書の墨色が非常に薄かったので師の豐山は、

習ふ子かこころもうすしする墨のうつろひやすき月草（註―うつるの枕詞）の花

の一首を添えて、もたせて歸したので自責の念にかられた母はつぎの一首を返した。

習ふ子の心もおなし月草のあたなはことにうつろひにけり

ようやく墨の色も濃くなったので豐山は、

またきより筆のすさひに見ゆるかな硯の海のたま拾ふ子は

と詠んで渡した。今度は外祖母の優子がつぎの一首を返した。

藻屑をはひろひ得るとも玉となせすすりの海のふかき惠に

天囚は豐山の教えをうけて歸ると、祖母の前で復習するのが常であった。よく覺えて歸った時は、祖母はこれをほめたたえ、忘れている時は、くりかえしくりかえし教えこんだ。祖母は昔の物語本や草紙の類を好んで讀んでいたので、雨に降りこめられたような日には孫たちを集めて、曾我兄弟の物語りをしたり、また師走ともなれば四十七士の話をしてきかせた。また時には、諸國の名所圖繪をとりだし、ここはたれそれが功名を立てた古跡であるとか、たれそれが名歌をよみのこした名所であるとか、いちいち繪を指さして説明した。

幼き天囚が、知らず知らずのうちに祖母から得た文學知識は極めて自然に成長した。祖母の感化力は大きかったものといえよう。幼な友達で豐山同門の河内禮藏（のちの陸軍中將）は天囚の少年時代を語って「幼より穎敏學業群を拔き」と評しているが、まこと神童というにふさわしかった。

「十三歳童詩」という天囚のつぎの詩は、未來の碩學を約束する芽生えであろう。

慘憺秋林月影移　小亭剪燈費吟思
慇懃勸客三盃酒　一曲陽關惜別離

都に上る

明治十三年、天囚は十五歳になった。東京に上り、學問の成就を願い、母の許しを乞うた。母と外祖母の深い慈愛の許に育った彼が遠く隔たる都への一人旅のことである。母の心にも迷うものがあったであろう。しかしわが子の學才を信じ、その將來を考える時、いつまでも一離島に埋もれさせるに忍びず、快く天囚の願いを許した。「母君のゆるしを得て故郷を立出で、物學にとて東の都に上」（「老媼物語」）ったと記している。

東京に出たものの、少年の心には故郷に殘した母や祖母のことが忘れかねた。「空の雁の傳言に恙ましまさぬを知り、水莖の跡の俤をしのぶのみ、折ふし草々の物語文を繙きては過し夜半の物語りを思出でて故郷に歸りし思をなし

たり」（同上）とも述べている。

上京した天囚は、まず父城之助と親交のあった重野成齋の許に身を寄せた。成齋は天囚の人となりと、才とをともに愛し、わが子のように取りあつかってくれた。成齋によって天囚は詩文の力を大いに養うことができた。成齋はまた天囚にすすめて昌平黌の碩學として知られた島田篁村の門にも學ばせた。篁村はそのころ下谷長者町に雙桂精舍という塾をひらき、經學を講じていた。天囚が宋儒の説に心を傾けるようになったのはこの塾に通ってからであった。

天囚の身たけは、すでに五尺八寸を超え、肉付きもよく、色はあさ黒く眉は太く、薩摩隼人を代表する偉丈夫になっていた。手織のゴツゴツしたさつま絣を肩ゆき短く着て、短い小倉袴をはいて、のそりのそりと講義の席にはいって行く姿は異彩をはなっていた。天囚の生涯の學友であった瀧川君山（のちに第二高等學校教授）はつぎのような追憶文を殘している。

一日同舍生郷里より碑文の起草を頼まれたれども、先生に願ふも畏多ければ誰人か筆を執るものぞといふ。彼の身長の一書生（註―天囚）我作らんと數日ならずして作り來る。布置齊整文字簡錬、自ら大家の規模あり。余一讀驚異その郷里と姓名を問ふに、種子島の産西村時彦と答ふ。これ余が碩園博士を識りし初めなり。

明治十五年九月、東京大學文學部に古典講習科が新設された。これを知った天囚は我が意を得たりとばかりこれに飛びついた。しかも貧書生には願ったりの官費生を募集していた。十六年に天囚は、この選拔試驗をうけて合格した。三十年後の大正四年八月、加藤弘之博士（天囚入學當時の東大總理）の八十歳の賀の祝宴が上野常盤花壇で開かれた時、大阪から上京した天囚が「古典科師友壽讌記」を草しているが、その中で古典講習科の必要と自分が同科を選んだ理由を述べたつぎの一節がある。

維新以降、長を取り短を補ふの説起り、教學兵刑より以て技藝の末に至るまで、一切西法を崇尚す。これ固より可なり。然れども、波を推し、瀾を助くれば、往いて而して反らず。明治十五年の交に豎（いた）り、海内靡然と

して洋風を模倣し、舊俗を抵排し、國典漢書、猶且つ棄てて而して講ぜず。まさに併せて彼の短を取つて而してまた我の長を舍（す）て、その弊言ふに勝へざるものあらんとす。今樞密顧問官男爵加藤博士、時に東京大學の總理たり。深く世を慨し、朝に奏して、特に古典科を大學に設く。四年一期、諸生を募り、以て國典漢書を講ぜしむ。前後兩期、入學者一百餘人、四方向往、舊學復興、而して機運また隨つて一變す。（後略）（原文は漢文、碩園先生文集、「廿一大先覺記者傳」による）

大學の文學部が神田の一ツ橋にあり、官費の學生は、すべてその寄宿舍にはいる規定になっていたが、そのころの天囚は至極神妙に燒芋と番茶ぐらいで放談高吟しておさまっていたが、その後校舍が本郷の加賀藩屋敷跡に移ってからは、學生は各自で下宿住いをするようになった。天囚も解放感からか性來の大酒癖が頭をもたげ、放蕩時代がはじまった。

天囚は本郷森川町に下宿をしていたが、ある時、流連して時を忘れている間に、下宿が類燒し、藏書や着物、夜具はもとより、かけがえのないものとして秘藏していた亡父の遺稿まで灰にしてしまったので、さすが豪放の天囚も色を失ってしまった。そのうえこの火事の一件が重野成齋の耳にはいり、日ごろの不行跡がすっかりばれたので、昔かたぎの成齋は烈火の如く怒り、天囚を勘當分ということにして、出入りを差し止めてしまった。

天囚と同じ一ツ橋の寄宿舍で寢食をともにした岡田正之（のちに文學博士、學習院教授）はつぎのように追憶している。

君と一ツ橋の東京大學寄宿舍に同舍してゐた時分に、君は侯朝宗の文章を好み、寢臺の上で得意に手を拍ち膝を叩きて琅々と壯海堂集の文を讀み聽かされたことが毎度あった。其面影は今（註—大正十三年）に歴々として耳目に殘ってゐる。侯朝宗は磊落不羈の豪傑風で、年少氣鋭の餘りに、聲妓を携へ文酒を恣にしてゐた學者であった。君が

放浪時代に於ける生活は全く侯朝宗の型で、是が屑屋の籠を生み出した次第であると思つてゐた。（重刊「屑屋の籠」序文より）

焼け出された天囚は、蓬來町に新たに下宿を求めた。ここには、いっそう亂暴な酒飲み書生がたむろしていたので、天囚はたちまち飲み仲間の中心人物におさまった。天囚の素行は、いつとはなく郷里種子島に殘してきた母の耳に傳わった。母はひたむきな愛情をこめて、わが子天囚を諭し戒める手紙を寄越した。もともと孝心厚しといわれた天囚であるが、年少氣鋭いかんともしがたく、ほとばしるにまかせた激情は抑える術もなかった。しかし、天囚はこの母の手紙だけは大切に保存し、天囚大成の後、博文堂主人原田庄左衛門（「屑屋の籠」出版者）に托してその表裝を頼んだ。

折角、頼みの綱を得て入學した古典講習科ではあったが西洋崇拜の時潮に抗しがたく、廢止の運命にさらされ、二十年には、まず官費制度が廃止、天囚はやむなく中途退學をした。天囚の放浪生活ははじまった。

処女作「屑屋の籠」

天囚の處女作といわれる諷刺小説「屑屋の籠」（前篇）が出版されたのは明治二十年五月である。これより先き、天囚がまだ東京大學に籍を置き、本郷森川町に下宿しているころ、邵青門（註—清の武進の人、古文にたくみ）の文章に心酔し、「青門文鈔」と題する本を吉川半七書店から出版したことがあり、つぎに大成館から十八史略の補注三巻を出したといわれている。（瀧川君山の追憶による）しかし自分の創作として世に問うたのは「屑屋の籠」がはじめてであった。

そのころ天囚は、日本橋蠣殻町に住んでいたが、日常の生活ぶりは、自ら筆にした「天囚居士小傳」（「屑屋の籠」後

篇）に偽りなく記されている。當時の天囚にとっては王侯の位も奴（やっこ）の如きものであり、富貴も彼にとっては敵でしかなかった。これが貧乏書生天囚が六尺の體をゆさぶり、天にうそぶく昂然たる姿であった。ある者は彼を氣違い扱いにしていた。というのは、彼には奇妙な病いを持っていた。こころに興がわくと、終日でも机の前に默坐し、動くことなく文章を作って樂しみ、世の中に食色のあるを忘れるくらいであった。

しかし、ひとたび彼の氣に逆ろうことが起ると、風が動き騒ぐが如く、心はゆらぎ、熱火を抱くが如くに燃えさかってくる。こうなると彼の魂は彼の肉體から脱け出し、自由にさまよい出てしまうのだ。自分でも自分の存在を忘れ、ふらりと家を飛び出し、町をうろつき、酒飲み仲間を連れ出し、心ゆくまで酒にしたり、心のわだかまりを解くのだった。幸い、氣分が直ぐなおれば、家に歸っておちつくが、氣がおさまらないと歸るを忘れて十日はおろか二十日もいつづけする。

たまたま、彼の友人が居所をつきとめると、酒代を懐にし、人力車をもって迎えに行く。その時の天囚はすっかり酔いくずれて、人の見さかいもつかない。友人は彼をなだめすかして車に乘せて宿に連れ歸り、一室に閉じこめ、彼に筆と硯とを與える。天囚の酔いも次第にさめ、あたりを見まわし、どっかとすわり、本心をとりもどして筆を執ると、たちどころに千萬言の文字が原稿用紙をうずめるという風であった。かくして「屑屋の籠」は生まれたが、どこへ行ってもこの作品を問題にしてくれる出版者はいなかった。

ある日、いつものように原稿を懐にした天囚は、日本橋久松町の博文堂主人原田庄左衛門の店にはいって行った。帽子もかぶらず、單衣に兵兒帶姿の天囚と友人鈴木天眼の二人をじろりと見た原田は怪しむばかりだった。と、天囚は原稿をとり出し、「これを買ってくれないか」と切り出した。無名の書生の原稿だが、原田は妙に天囚にひかれるものがあった。「よろしい、買いましょう」商談は一瞬にしてまとまった。天囚は「それじゃ、いくらで買ってくれる」と重ねて問うので、原田は「大奮發して一枚一圓づつで……」と答えると、天囚は大よろこびで素直に「ありが

とう」と禮をいった。十行二十字詰の原稿一圓は當時としては大きな價値であった。「天囚」の號もこの時はじめて用いたもののようである。

當時すでに文名の高かった東海散史（註―柴四郎、「佳人之奇遇」の作者）や原田などが、もし天囚に英文の力があったなら、鬼に金棒だろうと話し合い、天囚に勸め、榊原鐵硯の夫人が英語に堪能なので、夫人の許へ天囚を置いてもらったことがある。一つには夫人に天囚の行狀監督の意味もあった。さて夫人が英語の讀本を一回讀むと、天囚は何の苦もなくこれを覺えるので夫人は、改めて天囚の記憶力におどろいた。天囚は「漢文はむずかしいが英語なんて雜作のないものだ」とそれ以上熱心に學ぼうとしなかった。もしこの時、天囚が英文を熱心に學び、英書を讀破したなら、天囚の思想も大いに違ったものがあったであろう。

二十二歳の天囚は、このような豪放ぶりを發揮しながら、當時の社會、世相を寫しながら皮肉な筆で批判した。天囚は滔々と押しよせる歐化主義の文明と國粹的な保守思想が混然として雜居する社會を眼の前にして對照的な世相を默視することがで來なかった。

「屠屋の籠」はある屠屋の一室に集まったもろもろの屠物を代辯者として、過去の身の上をかこつものもあれば、新文明を謳歌するもの、これに反駁する日本主義者もあるといった趣向である。このアイデアは馬琴の「質屋庫」にヒントを得たようである。その序文の一節につぎのように記されている。

一寸の虫にも五分の魂と申す通り人は皆氣に喰はぬ事の多き中にも拙者の虫は甚だ殺にくい奴にて折々見る事聞く事逆鱗イヤ虫の好ない事がある底で頭はむしやむしや氣はくしやくしや據なく筆と硯に相談して小言を並へ立しが自分も岡目連の中にあれば矢張り偏執の岡目を免れず（中略）或は馬琴の燒直しと誹るべく或は知つた振の奴だと罵るべく或は淺薄で頑固説で論理を知らぬと批難すべく或は小説體に合はぬと評すべく外面のみにて其精神の微妙を寫し出さずと嘲けるべし一々御尤千萬一言の申譯なし（後略）

「屑屋の籠」の全貌をここで紹介する事も出來ないので、天因の「當世書生氣質」とも思われる「眼鏡の法螺、筒袖の辨駁」を拾ってみることにする。

書生の種類分つて五とす曰くぬらくら書生曰くのみ書生曰く金魚書生曰く乞食書生曰く純粹書生是也國元より金を取り親のすねのみかぢり盡し之を以て遊蕩に資す朝夕湯やの二階に戯れ輿山の楊弓場に座り込みイヨウエライ隊長大中りなんど鶴の一聲軍官が戰場に出て敵の大將と引組みて首ねぢきりしうれしさも斯くやあらんと云ふ面相金泊付の大馬鹿どの歸りは芳原ひやかしぞめき鼻が低いの髪が拔けたのおだふくとかオールドメンとか冗口だらだら

忝も書生の名號を冠する者が賤業社會を相手としソウかと云つて返りはせず其おだふくやかぼちやが許にけふも流連（中略）宿やの二階の畫寢ざめブックをセブンにオー合點と又も登るは湯島天神魚十が許に大一坐都々逸端歌役者の假聲藝者の氣嫌を取々に口すぼめつ鼻うごめかし烟管持つにも一寸身振團州はヨウガスナ音羽やにカヂルとか吾こそ天下の色男金五も丹二もそつちのけと言はぬ計の身なり格好嫌味澤山いけすかない女のほれぬが無理かいナと藝者の臍では茶を沸かす。（後略）

これがぬらくら書生で、「のみ書生」とはあちらこちらと學校を轉々として歩き、ききかじりの生意氣書生、「金魚書生」はこざっぱり着飾り、話すことも「社會の公利國家の財政は」とか自らを高く評價させようと企み、裏ではこそこそと女郎買い遊びをする中味の空っぽの書生、「乞食書生」は見すぼらしい風態で玄關先に机一つ、書物は讀まず、やたら空想にばかり走る。「純粹書生」とはつぎのようなものである。

純粹書生の資格を説んに卽ち余（註―筒袖）が如き者を云ふ權貴に媚びず貧賤に驕らず分を守りて己を勉め腹に萬卷の書ありと雖口舌を借りて虛名を求めず腕に千鈞の力ありと雖ども文字を以て浮利を貪らず其志は鍛ひに鍛ひし鐵の如く其心は磨きに磨きし玉の如く其氣は皎々烈々として秋霜白日の如く其節は巍々嶷々として白山富岳の東海北陸の望たるが如く其才は則ち王佐の器覇者の師以て諸侯を九合すへく以て天下を一匡すべきなり然るに余の今屑

籠の中に沈淪する所以の者は凡夫其故を知らざるべし孟子曰く磁器ありと雖ども時を待つに如かず時乎時至らず不義にして富み榮へんより義を取て屑籠に在らんのみ（後略）

「屑屋の籠」の前編は非常な好評を拍し、天囚の文名は一時にあがった。ひきつづきこの年の秋、後篇の原稿を書き上げ、翌二十一年五月に出版された。これまた大變な評判となり、明治二十六年四月には合本增補三版が出ており、天囚歿後大正十三年十月に重刊四版を、十一月には五版が出ている。重刊の際に學友岡田正之博士の序文につぎの一節があるが、天囚の洞察力の鋭さを物語っている。

君が世態人情を寫せる間に横溢せることは、道義的精神である、一片の耿々たる至誠である、日本臣民といふ自覺である。

君が中年以後に於ける謹嚴の實質をなしてゐるのは、矢張此の精神此の至誠此の自覺に外ならない。放浪時代と中年以後の摯實時代の主義は變りがない。（中略）

屑屋の籠は諷刺的の小説で、當時の社會に於ける各方面に向つて諷誡譏刺の筆を逞くしたものである。政治、教育、宗教、風俗、手當り次第に書き、思ふ存分に論じ、時には當路の大臣を罵り、時には黨人の弊風彈劾し、時には書生の放言高論を戒め、時には富豪鉅商の太平に狃れたことを攻擊し、婦德の説や、士氣衰頽の歎息もあり、極めて痛切に、極めて平易に、通俗的に、其の狀態を寫しつつ、論議諷刺してあるから、正しく明治二十年前後の世相史とも謂ふべきである。（後略）